

複合接続助詞「うちに」の 時を特定する用法の分類

沢 田 奈保子

はじめに

時にかかわる従属節を作る複合接続助詞には、「ときに」、「あいだに」、「までに」、「うちに」、「まに」などがあるが、その中でも「うちに」は、外国人対象の日本語教育においては、中級段階で提出され、それ以後頻度も高く、かなり複雑な意味・用法を内包していると感じさせるものである。

初級段階で提出され、頻度も特に高いと思われる「ときに」の難しさが、接続において述語が現在形を取るか、過去形を取るかといった、いわばテンスやアスペクトの問題に集中しているのに対し、この「うちに」の難しさは、主節における文の形態や述語の結び方にかなり制約があること、つまり、固有の陳述性を持っていることにありと考える。

I 研究の動機となった問題点

まず、日本語教育の現場で出てくる次のような問題に着目する。

中級用テキスト『長沼現代日本語二』には、以下の順で、この「うちに」を用いた文が提出されている。

- (1) みんながびっくりして、どうしてよいかわからず、さわいでいるうちに、一人の子供が大きな石を持ってきて、水がめに投げつけました。(第12課 本文)
- (2) テレビを見ているうちに、(ねむくなった。)(第12課の、後件を作らせる練習問題において)
- (3) おばあさんは明るく朝、うすぐらいうちに仕度をして、おじいさんに教わった通りに、すずめの宿へ行きました。(第16課 本文)
- (4) 見舞いに行こうと思っているうちに、偶然地下鉄の中で角田さんの奥さんに会いました。(第20課 本文)

＜問題点＞

- ① (1)～(4)の例文は果たして用法的に同じだろうか。もし違うとすれば、どう分類すべきだろうか。
- ② 例文を提示するだけで、用法について特に注意を与えなかったクラスでは、第12課の段階で次のような文を作る学習者が多かった。
 - (5) 友だちと話し合っているうちに、お客がたずねてきた。
 - (6) 部屋のそうじをしているうちに、電話がかかってきた。これらは(1)や(2)と同じ用法の文として認められるだろうか。やや不自然な印象を受けないだろうか。不自然とすれば、それはどこに起因するのだろうか。
- ③ (1)～(4)とは異なる「うちに」の用法がほかにないだろうか。可能な限り網羅し、適切な分類をして整理してやらなければ、学習者には「うちに」全体がつかめないのではないだろうか。

Ⅱ 分類の一案

これまで「うちに」の用法について、現場の立場から分類を試みた論文としては、浅野百合子氏（1975）「「うちに」「あいだに」「まに」をめぐって」、鈴藤和子氏（1984）「～あいだ／～あいだに」などがあるが、私は「うちに」が固有の陳述性を持っている接続助詞であるという一つの見解から、次の三点を指標として、分類を試みたいと思う。

1. 接続^(注1)
2. 後件に現れる文の形態的な特徴
3. 表現意図または話者の表す感情的なニュアンス

上記の1～3を分類上の指標とすると、以下の四種に大別されるのではないかと考える。

Ⅱ－A 第1型（行為継続、変化発生型）

行為の継続が招く変化（主体自身の変化、事態の変化、新たなできごとの発生等を指す。以下、本稿ではこれらを統括して「変化」と呼ぶことにする。）を表す用法で、話し手が、変化の発生を、行為の継続やそれに伴う時間の経過と結びつけて述べようとする場合に使う。結びつきにおいては、客観的に因果関係の成立

するものでなければならない。(注2)

<用例>

- (7) 調べているうちに、ある重要な証拠が出てきた。
- (8) 友だちと話しているうちに、列車は東京に着いた。
- (9) 毎日顔を合わせているうちに、好意を持つようになった。
- (10) 仕事を続けていくうちに、社会の矛盾に気づいた。
- (11) 資料を読んでいくうちに、古代史に興味がわいてきた。
- (12) 山田さんの家へたびたび行くうちに、家族の人たちとすっかり親しくなった。
- (13) テープを何度も繰り返して聞くうちに、意味がわかってきた。
- (14) いっしょに仕事をするうちに、人柄や性格がよくわかってくるものだ。
- (15) 会議を続けるうちに、両者の意見はますます激しく対立した。
- (16) 冷房のきいた部屋にいるうちに、腰が痛くなってきた。

<接続>

行為の継続を表すアスペクトと接続する。行為の継続を表し得るのは、主として動詞の「テイル形」であるが、そのほか、「テイク形」の中にも、継続を表す場合(用例(10)、(11))があり、また、基本形でも反復継続を表していると見られるもの(用例(12)、(13)、(14))、単独で継続的行為を表し得る「続ける」(用例(15))、状態性の行為で、テイル形をとらない「いる」などは、接続において、この用法の成立条件を満たしていると見てよい。

<後件に現れる文の形態的な特徴>

変化の発生を述べる文に限られる。

II-B 第2型(タイミング尊重、限定型)

話し手が、主体の行為や事態の発生を、適切な時期に収めたい(限定したい)という期待を持っている場合(あるいは、持っていた場合)に使う用法で、状況が対立的な方向へ移行していくものであることをはっきり意識して発言するものである。(注3)

<用例>

- (17) 朝のうちにせんとくを済ませておきなさい。

- (18) 学生のうちにやりたいことをやっておこう。
- (19) あついうちにどうぞおあがりください。
- (20) 社長が元気なうちに、後継者を決めておかなければならない。
- (21) 暗くならないうちに、帰ったほうがいい。
- (22) おじいさんが生きているうちに、会いに来てほしかったのに。
- (23) 客が来ないうちに、買物に行って来よう。
- (24) 忘れないうちに、メモしておいた。
- (25) お金があるうちに、買いたいものを買っておいたほうがいい。

<接続>

第1型が行為の継続を表し得るアスペクトに接続するのに対し、この用法においては、状態を表し得る名詞、形容詞、形容動詞などの品詞に接続するのが特徴であり、それぞれ名詞と結合する形をとる。また、第1型と重なり、動詞の「テイル形」にも付くが、この場合は行為の継続というよりも、ある状態の続いている期間としてとらえられると見てよい。このほか、状態性の強い、動詞の「ナイ形」、テイル形をとらず基本形のままで状態を表す「いる」、「ある」、「できる」なども、接続面でこの用法の成立要件を満たす。

特徴的な現象として、名詞、形容詞、形容動詞の場合、対立する状況を表す語に「ならない」を伴えば、同じ内容を表す文となる。たとえば、(18)の前件は、「社会人にならないうちに」と言い換えても文意は変わらないし、(21)の前件は、裏返せば「明るいうちに」となる。

<後件に現れる文の形態的な特徴>

話し手の期待感から、必然的に、意志、命令、依頼、勧告、願望などの表現と結びつくことになる。

II-C 第3型（時期尚早、遺憾型）

主体の行為や事態の発生が、時期尚早で不適切であることを述べる用法である。実際に起こってしまった事態に対する遺憾の念を表す場合もあれば、そうならぬよう歯止めをかけようとして発言する場合もある。

<用例>

- (26) 子犬のうちにしつけておかななくてはだめだ。

- (㉗) まだきれいなうちに捨ててしまうなんて、もったいない。
- (㉘) 油が十分あつくならないうちに肉を入れると、こげつきます。
- (㉙) 終わりのベルが鳴らないうちに、本やノートをしまうな。
- (㉚) 彼は私がまだ全部言い終わらないうちに、外へ飛び出していった。

<接続>

第2型と同様の特徴を持つ。

<後件に現れる文の形態的な特徴>

変化の発生を述べる文のほか、必然的に、禁止の表現や、マイナス評価を表す文が多くなる。

Ⅱ-D 第4型（はやさ強調型）

一般的基準として短いと思われる時間や、時期的に早いと思われるある期間を設定することによって、主体の行為や事態の発生のはやさを強調的に述べる用法である。

<用例>

- (㉛) 一瞬のうちに廃墟と化した。
- (㉜) すもうとりだけあって、三人前のすしをほんの四、五分のうちに平らげてしまった。
- (㉝) 人々はうすぐらいうちに起きて、太極拳を始める。
- (㉞) 面接を受けてから一週間もしないうちに、内定の通知が来た。

<接続>

第2型、第3型と共通していると見てよいが、次のような慣用句的用法もある。

- (㉟) 漂白剤につけると、まっくろなシャツがみるみるうちに白くなった。

<後件に現れる文の形態的な特徴>

変化の発生を述べる文が主となるが、第2型との相違が微妙な命令形などもあり得る。たとえば、用例(㉟)を次のように変形させることも可能である。

- (㊱) 中国の人たちのように、うすぐらいうちに起きて、太極拳をしてごらん下さい。

この場合、形態的には第2型と区別がつかないが、話し手の意図は明らかに第2型と異なる。「うすぐらい」状況が適切で、そのタイミングをはずしてはなら

ないといった意識はなく、単に「早朝であること」を表しているだけである。従って、話し手の意図に注意すれば、第2型との混同は避けられることになる。

Ⅲ 関連する表現との比較

用法を分類することによって、学習はより効率的になる。しかし、それでもなお、関連表現との混同から、誤用が現れる。本章では、実際に現場で体験した誤用例とその修正例を挙げることによって、関連表現との比較にアプローチを試みる。

＜「うちに」の第1型／「～と」、「～たら」＞

第一章の問題点②のところで挙げた用例の(5)と(6)は、第1型の成立要件である因果関係を欠いたところから出てくる、一種の誤用例とみなすことができる。再び、ここに提示してみよう。

(5)＊ 友だちと話し合っているうちに、お客がたずねてきた。

(6)＊ 部屋のそうじをしているうちに、電話がかかってきた。

このような文を作った学習者に、その表現意図を確認してみたところ、(5)の「お客がたずねてきた」という事態と、(6)の「電話がかかってきた」という事態は、それぞれ話し手にとって全く突発的で、そのような事態の起こる可能性すら意識されていない状況下での出来事としてとらえられていることがわかった。つまり、これらの文の背後には何ら因果関係を成立させるようなコンテキストが意識されているわけではない。従って、(5)と(6)は因果関係を欠いた第1型の誤用例とみなされるのである。具体的に言えば、たとえば(5)の「客がたずねてきた」という事態は、「友だちと話し合う」という行為が継続したから引き起こされたわけでもなく、話し合いによって時間が経過したから引き起こされたわけでもないの、そのような場合に、いかにも因果関係をにおわすような第1型の用法を使うのは不適切だということである。

このような誤用例を修正するには、二つの方法がある。一つは、次のように因果関係を成立させるような文脈を補うことである。たとえば、(5)は次のようにする。

(5) 友だちと話し合っているうちに、約束の時間になり、お客がたずねてきた。

もう一つは、「うちに」の第1型と同様に、状況の変化や事態の発生を述べる時に使われるが、前件との必然的な結びつきを必要としない（すなわち、因果関係がなくてもよい）構文に変えることである。それには、「個別・既定・過去」^{（注4）}の条件表現を形成する「～と」か「～たら」を使うのが最も適切である。

(8) 友だちと話し合っていると、お客がたずねてきた。

(9) 友だちと話し合っていたら、お客がたずねてきた。

さて、第1型の成立要件である因果関係の有無の判断が容易にできるものは、簡単な指摘で修正できるわけだが、次のように、非常に微妙な例もあるので、付記しておく。

第一章の冒頭で挙げたテキストの中の例文である。

(1) みんながびっくりして、どうしてよいかわからず、さわいでいるうちに、一人の子供が大きな石を持ってきて、水がめに投げつけました。

(4) 見舞いに行こうと思っているうちに、偶然地下鉄の中で角田さんの奥さんに会いました。

この二つは、私は第1型に入れるべきだと判断している。これらの後件は、(8)の場合と違って、あまり突発的な印象を聞き手に与えない。因果関係は見いだしにくい、少なくとも、(9)の場合とは違い、ある程度状況変化の予感を無意識に持っていた場合の発言と見ることはできないだろうか。これらは、第1型と、「～と」や「～たら」を使う用法との中間に位置する、ネイティブでも背景にある状況によって、あるいはその時の心理状態によって、どちらを選ぶべきか揺れ動くところではないかと思われる。つまり、(1)や(4)は、客観的に見れば、前件と後件の間に因果関係は成立しないのであるが、この話し手としては、時間の経過に従って、無意識に状況変化の予感を抱いていたため、その状況変化の発生を、それ以前の状況と心理的に切り離すことができず、あたかも行為の継続や時間の経過に関連して起こったかのように二つの状況を結びつけて表現してしまったものと見られる。

このような場合でも、「うちに」を使うことが許容されるのは、前件と後件の間に少なくとも時間的な連続性、状況の関連性が認められるからで、心理的な影響を受けて、それらが因果関係に近似するものとしてとらえられるためと考えら

れる。たとえば、(1)はある物語の中の一文だが、その前には「大きな水がめのそばで遊んでいた子供たちのうちの一人が、水がめのふちに上がり、足を踏み外してその中に落ちてしまった」という文脈がある。ということは、後件で述べられている事態は、偶然ではあっても、話者にとって全く突発的で前件と何の連続性も関連性もないと言えるほど、意外な事態ではないのである。仲間の危機を目の前にして、その場に居合わせた子供たちの中から一人くらい思いきった行動をする者が出てきても不思議はない。その場のだれかが何かをするのではないかという予感あるいは期待が入り込む余地はある。では、もしその場に居合わせた子供たちのうちの一人ではなく、第三者が突発的に場面に飛び込んできたという状況だったら、どうだろう。次の文は、明らかに不自然と言えないだろうか。

(40) ? みんながびっくりして、どうしてよいかわからず、さわいでいるうちに、突然一人の老人が現れ、大きな石を持ってきて、水がめに投げつけました。

これを「～と」や「～たら」に変えてみると、不自然さは全く感じられなくなる。

(41) みんながびっくりして、どうしてよいかわからず、さわいでいると、突然一人の老人が現れ、大きな石を持ってきて、水がめに投げつけました。

(42) みんながびっくりして、どうしてよいかわからず、さわいでいたら、突然一人の老人が現れ、大きな石を持ってきて、水がめに投げつけました。

「～と」や「～たら」は、「うちに」の第1型と違って、このような突発的な出来事を表す文をも成立させてしまう。それは、「～と」や「～たら」の構文が、「うちに」の第1型のような、基本的に因果関係の成立を必要とする構文ではないからで、時間的な連続性は必要としても、状況の関連性までは必要としないからだろう。このあたりが、おそらく「うちに」の第1型と「～と」や「～たら」との境界線になるのだろう。

用例(4)を検討すると、さらにこのことが裏づけられる。たとえば、(4)を「～と」の構文に変えると、次のようになる。

(43) 見舞いに行こうと思っていると、偶然地下鉄の中で角田さんの奥さんに会いました。

この場合、後件に登場する角田さんの奥さんなる人物は、前件の状況と関連を

持たない第三者という感じが強いのではないだろうか。

一方、「うちに」を使った(4)のほうでは、第三者とは思われず、前件で表された状況と何か関連を持っている人間、すなわち、見舞いに行こうと思っている病人の奥さんに違いないと聞き手に確信させるのである。

＜「うちに」の第1型／「～あいだに」＞

次の文は、現場で第1型の誤用例として出てきたものである。

(44)＊ 私が銀行へ行っているうちに、家にどろぼうが入った。

先程の(5)、(6)と同様、因果関係が認められないため、第1型としては不自然になるのである。しかし、修正のしかたは、(5)、(6)の場合とは異なる。まず、因果関係を成立させるような文脈を補いにくい。「どろぼうが入った」という状況は、突発的な事件と受け取るのが普通で、先程の(4)のように、「約束の時間になったから」というようなシチュエーションは日常的にありうるものではないから、補うわけにはいかない。また、この文の場合、「～と」や「～たら」に変えても、非文法的な文や不自然な文になってしまう。

(45)＊ 私が銀行へ行っていると、家にどろぼうが入った。

(46)？ 私が銀行へ行っていたら、家にどろぼうが入った。

(45)がなぜ非文法的になるのかと言うと、「銀行へ行っている」という状況と、「どろぼうが入った」という出来事は、「同じ場所で、同じ観察者（ここでは話者の私）が報告できる」^(注5) 類のものではないからだと説明できそうである。

(46)については、不自然さの度合いにおいて(45)と少し差異があり、非文法的と断言しかねるが、不自然さが感じられることは否定できないので、やはり修正例としては不適切である。

そこで、(44)の文を直すとしたら、「ときに」か「あいだに」を使うことになるが、「留守中にどろぼうが入った」という状況は、何時何分かはわからないが、とにかく時間の幅を示して、その間の一点であることを正確に、客観的に言い表そうとする「あいだに」を使ったほうがぴったりするのではないと思われる。

(47) 私が銀行へ行っているあいだに、家にどろぼうが入った。

ま と め

本稿では、外国人対象の日本語教育の立場から、「うちに」の用法について、分類を試みた。最後に、まとめとして、それを簡単な表にして示すことにする。

「うちに」の用法

	接 続	後件に現れる文	ニュアンス
第 1 型	動詞 { テイル形 テイク形 基本形 (行為の継続を表し得るもの)	変化を表す文	変化の発生を行為の継続と関係づける (因果関係の暗示)
第 2 型	名詞、形容詞、 形容動詞 { テイル型 ナイ形 基本形 (状態を表し得るもの)	話者の意志、 命令、依頼、勧告、願望などを表す文	タイミングを尊重し、行為や事態の発生をコントロールしようとする
第 3 型	"	変化を表す文 禁止やマイナス評価を表す文	時期尚早な行為やできごとに対するマイナス・イメージ
第 4 型	"	(主として) 変化を表す文	変化の早さを強調する

- 注 1. 浅野百合子氏、鈴藤和子氏ともに分類の際の指標としては用いていない。
- 注 2. 浅野氏が最初に唱えた説で、鈴藤氏も同意見を述べている。たとえば、浅野氏は行為的因果関係を表す用例として「持ち歩いているうちに、なくしてしまった」という文を挙げ、時間的因果関係を表す用例として「買おうかどうか迷っているうちに、売り切れてしまった」という文を挙げている。鈴藤氏は直接的な因果関係を持つ用例として「森の中をさまよっているうちに、川のそばに出た」という文を挙げ、間接的な因果関係を持つ用例として「本を読んでいるうちに、暗くなってきた」という文を挙げている。

本稿も、因果関係については、基本的に両氏と一致する立場をとる。

- 注 3. 「対立する状況が意識される」ことについて、寺村秀夫氏は『日本語の文法(下)』(P.61125～P.6213)の中で、次のように述べている。

「「うちに」は、それに先行する状態は、その状態が終わった次の状態と対立するものとして意識された状態である。「暗いうちに野良へ出かけた」というのは、明るくなってから働きに出かけるのは普通の、つまり取り立てて言うほどのこともないことだが、明るくなってから行くのではなく、という含みがそこにある。「暗くならないうちに帰って来なさい」というのは、暗くなってから帰って来てはいけないという含意がある。」

- 注 4. 『教師用日本語教育ハンドブック③文法 I』による。

- 注 5. 久野暲氏が『日本文法研究』(P.120)の中で示した「 S_1 S_2 」構文の用法上の特徴」による。

〔参考文献〕

- 浅野百合子(1975)「「うちに」「あいだに」「まに」をめぐる」『日本語教育』27号
- 鈴藤 和子(1984)「～あいだ／～あいだに」『日本語学』第三巻第十号
- 寺村 秀夫(1981)『日本語の文法(下)』国立国語研究所
- (1984)『日本語のシンタクスと意味』第Ⅱ巻 くろしお出版
- 久野 暲(1973)『日本文法研究』大修館
- 金田一春彦(1976)「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアス

ペクト』むぎ書房

吉川 武時（1976）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のア
スペクト』むぎ書房

鈴木 忍（1978）『教師用日本語教育ハンドブック③文法Ⅰ』国際交流基金

森田 良行（1984）『基礎日本語3』角川書店

長沼 直兄（1983）『長沼現代日本語二』言語文化研究所付属東京日本語学校